

18

Vol.18 「秀司様のご結婚」

「おやさまを求めて」中山正直

Happistで  
チェック!

## 01 いんねん寄せて守護をする

おふでさきのご執筆を開始された明治2(1869)年、おやさまのご長男で、当時中山家の戸主となられていた秀司様のご結婚なされました。お相手は小東まつ糸様と仰います。

このご縁談には、親神様の深い思惑がありました。

当時、秀司様は既に49歳で、内縁関係にあった女性もおられました。けれども、おやさまは、この女性をお屋敷から出され、当時19歳のまつ糸様を、自ら出向いて秀司様の妻として迎えられたのです。

このことは、常識で考えれば理解しがたいなされようで、秀司様、まつ糸様ご当人も、さぞ困惑されたのではないのでしょうか。けれどもこの縁談は、どうしても進めなければならぬ理由があったのです。そのことを、おふでさき第一号において、次のように述べられます。

これから八せかいの人八をかしがる なんぼ八るてもこれが大一 (一 71)

せかいに八なに事するとゆうである 人の八らいを神がたのしむ (一 72)

めへゝのをもふ心八いかなでな 神の心八みなちがうでな (一 73)

せんしよのいんねんよせてしうごふする これ八まつだいしかとをさまる (一 74)

周囲の人や当人が、人間心からどれだけおかしいと思っても、親神は全く違う考えによって導いている。この縁談は、前生のいんねんある者同士をもって夫婦となすのであり、これによって末代治まるのである、との仰せです。

ここでの「前生のいんねん」とは、元初まりの道具衆としての魂のいんねんであり、秀司様は月よみのみこと、まつ糸様はたいしょく天のみことの魂をお持ちのお方であると伝えられます(こぶき和歌体十四年本)。

おやさまは、世界一れつたすけを進める上で、元初まりの道具衆の魂のいんねんある人々を寄せることをお急ぎ込みになりました。おやさまは、まつ糸様にこの魂のいんねんを説き聞かせ、よく納得させられた上で、中山家の人として迎入れられたのです。

この「前生のいんねん寄せて守護をする」とのお言葉は、秀司様とまつ糸様のご縁談

に関してのお言葉ですが、一般の縁談についてはどうなのでしょう。

例えば、おさしづに、

あれとこれと心寄り合うがいんねん、いんねんなら両方から寄り合うてこうと言う。いんねんがありゃこそ、これまで縁談一條皆治まって居る。

(明治27年9月21日)

縁談一つ、心と／＼縁繋ぐ事情、心と心繋いだら生涯と言う。(明治28年6月24日)

などとあるように、私たちも夫婦となるのは、何かしらのいんねんのある者同士が結ばれると悟れます。

## 02 夫婦の理合い

さて、お道の教えの上で、夫婦はとても重要な間柄として教えられます。

翌、明治3年にお教え下さった「ちよとはなし」に、

このよのぢいとてんとをかたどりて ふうふをこしらへきたるでな  
これ八このよのはじめだし

とあるように、「天」は月様、「ぢい(地)」は日様の理で、夫婦は、この天地抱き合わせの理を象ったものであると教えられます。

元初まりにおいて、親神様はまず「うを」と「み」を見出し、それを夫婦の雛型として貰い受けられました。続いて「しゃち」と「かめ」を引き寄せ、それらを「うを」と「み」に仕込み、男女の雛型と定められました。そして、「うを」にはいざなぎのみこと、「み」にはいざなみのみこととの神名を授けられ、月様はいざなぎのみことの体内に、日様はいざなみのみことの体内に入込んで、人間創造の守護を教え、そうして人間をお創りくださいました。

ふうふそろうてひのきしん これがだいゝちものだねや(十一下り目 ニツ)

とも教えられる通り、いんねんあって結ばれた二人が、それぞれの徳分や役割をしっかりと理解し、親神様のお心に添い、心を寄せ合って一手一つに歩む、その誓いと努力が肝心で、そこから陽気ぐらしは生まれていくのだと思います。

そうしたことも踏まえれば、秀司様のご結婚は、元のやしきたる中山家に、陽気ぐらしへと向かうたすけ一条の土台を固めるという、とても重大な事柄であったといえるでしょう。